泥洹七部集

後猿蓑

四

中村俊定文庫
文庫 18
685
4

大正

帝國圖書館藏

續猿蓑集巻之上

中村俊定文庫

芭蕉

八九月京にて百傳ふる柳ありけるを

夏のゝすゑ花盛りなりけるとて

初雁とゝろ馬もこの花野哉　治國

何をゆゝしつゝ晩の秋ゝ　馬莧

きのふゝゝゆゝ秋ゝ月の色　里圃

物眷こゝろ乱て朋友をゝもふ　治

蕉

波柿もとゝ風に吹れて
孫う孫とる　祖父り　傳授　里
服部に結て　刀　蔓
嫁を志ゆへ　鎌の脇　蕉
孫衆の中を一　さけ壺にて　沾
十里そうに死　所へ　蔓
笹の葉に山陽　埋て　里
ゆうに陸うつなゆ　門の書つけ　沾
蕉

川人う腹を出たるさ　物　蔓
やつゆく　少　里
ゆうに　の　蔓
ゆ　の　蕉
ゆ　の　沾
ゆ　の　蔓
伊勢の　面に　里
長孫の　伸乃そ　沾
くうゆ　の　蕉

禪寺に一日あそぶ碑の上　里
極の角乃きてぬ葵宛　莧
侍しの半に侍をきゝふや　蕉
さゝれ奴嬢ゐ中をうゝ内泥　沾
月待ゑ侍岩高のうちそひ　莧
離の蕚死ゐ宛ふきはし　里
ゆゝれて来て西まも格もむく　沾
侍侍きゝる如かるり乃ゐ　蕉

削ゆゝに也乃如なのゐゝの風　里
ゐ物ゝに屋のゝちれゝれゝ　莧
引立てゆゝに鐘ゝる寺ゝ和ゝ　蕉
ゝ川と火入ゐ和ゝ　沾
花ゝゝゝ弱ゝ根ゝのゝめゝれて　莧
涙かゝらのゝちるかゝゝふの　里

馬苋

雀(カラ)の字や拂のかたて落るものあり

てり茅ふの茅の穂もしろき月　治圃

高宮を雲ちてきんれる秋茅て　里圃

鈴川しかるにのこく月漏　苋

雲ちまちち女郎ふるもの　治

蓮を志いてしふの　法足　里

悔さきりの一歩のんてとなひ　蕓
清水さんてちまりあり　沾
あまさ〻陳菓なのあ氣さ　星
あ鳴りさ〻国方乃客　蕓
何度もなくてめしてを紀弱迎　沾
風よりあまかるお稲の種の月　星
意所　秋の行あ行久て　蕓
雁行のさいまと如廣呼乃　沾

編

俳さる伊勢外宰洲のかゝ　蕓　星
蓑を考〻紀わらぬ　一法　蕓
信来も志わりて意きる風蟹　沾
裏静なる竿乃　保編　星
雪の行あを雪浅掃部　蕓
志ちね合点てかゝて有る　沾
手しに風うち紀ちを中毒　星
之清新賛のうなのうちや　蕓

汁の実ふとろろ茄子のもり盛て　佐
あるゝ物を苅てと成　里
にしに寺の拾圓を出し　莨
屋のおとゝ乃あと陪き　佐
隙うりてゆくされつゝ小商　里
年ゝして夜よゝ秋祝ふ　莨
肌入て秋になりぬ月の月　佐
彩よゝちるゝ花の雪　里

山盃を寶の毎ゝあと向て　莨
ゝ身て切物乃元日　佐
垂の志れゝ帷子のゝひ和　里
竹て氣味よゝき枝葡の風　莨
花の行栄氏立雛の舞ゝり　佐
ゝ国の土のかゝくゝけゝ　里

ゆゝしき雨引すゝめる嵐の菊　里圃

みゝのおもきはなのやどれる露　沾圃

大根のそゝけ土を離れて　芭蕉

上下ゆゝしもに名ある茶の湯歌　馬莧

所切る月見の膳の集め洗　沾

茶うちゝとる夜　里

知恵院の雪り紅葉拾ひて　莫
ちらし紅葉を楓わかく　佐
廻の鶴よりもさらけなり　里
月剃て宮もよのんこもり　莫
仏前を猿河の郷帰りて　佐
中こちんの中やしぬりの紅　里
峯の笠ふるもちる紅の泥ちり　莫
伊弱東つゝみ綿とりの面　佐

うき旅を賜とつれ立侍る　里
さびしさ　莫
末舟の花の中より侍りて　佐
梅の侍へ行きさきてゝり　里
百姓よりなりて世ちもも家　莫
こゝの見を膳の山あゝあ作業　佐
青柳の波紙作おろし垂　里
りのあつまそのりもきね　莫

蘇絡線

物を言ふ蘇の中の絡線の
ふるき人々いひちらして　注　里
尖蛙のやいけて撥手ぬ[illegible]
一石橋　雄乃米　佐
折しも宴月の[illegible]　里
仰ぎ加減乃ちちのおもさ　芭
月[illegible]　佐
おもひのまゝに[illegible]　里

手鞠よ娘をやいて焼のさゝ　芭
ゝゝの[illegible]をこちらて仕ふる　佐
花のあと蹄躅のゝゝわとろい　里
寺のひけゝる山陰の　まち　芭
みゝゝりを[illegible]ゝ[illegible]他の弱　佐
一面作て[illegible]風　里

猿蓑にもれぬる霜の朽葉かな　芭蕉

なき音もれぬと静かなる冬　支考

水かるゝ池の中ゆりてありて　惟然

籠作りまはしまきゝの鶏ゝあるゆゝしやうて霜の月　蕉

つゝてる死かゝれぬ命なる秋　考

佐園

ふるさとの一石のてらさるる鶴の夏　然

夏の深の癖をなをすきり　蕉

聲ゝ寺てゆくともせたは秋夜　考

中国よりのせの中のたたく　然

初日のねをとそやゝ振舞ふ　蕉

一言相殘ゝ失てさつぬる　考

きさんなる事ふの比の振振　然

ふに門あるみとせの月　蕉

初あり　畑の人のうけまるる　考

ゝ除光る波ゝ小鶴　然

尺てゐる紀元弁当花の咲かゞ　蕉

岸掠ひとりゆくゝ永きは　考

ゝ風のゆるゆる如北にゝり　然

わらぶに脈をたゝるゝ陰　蕉

枚呼の四保をなる長夏　考

喧吟尺さとも世ゝとせゝ　然

大せいなはう二なを雪の後　蕉
雪うさぶし　中のうを　考
まつ花の雪ふ掛を皆ゆ家に　然
奥の世五を一の後　蕉
酒よりも肴のやうふ月況て　考
赤鶏況を一座　面　然
うゝゝね姫のうゝゝれ川を　蕉
霜汗のとゝ捕うゝの蓑　考

ゝ蓑をはゝとはゝ花杉の風　然
大二つうひの国ゝ雪　蕉
来搗もふゝよゝ　考
ゝゝ面て市の中を押あふ　蕉
けあゝ汗を花のけも　然
鴨の油のまゝとぬけ無　考

今宵賦

野盤子
支考

今宵は六月十六日のそらみつにかよひ月は
東方の乱山にかゝけて衣裳に湖水の秋
をふくむされは今宵のあそひをなし先
尊卑の席をゆるさすやゝ志いし敵て
こゝに客人をこしに涼みをして野は里
ひら殺おもふにきちとしかゝりたる人さへ
さゝん人を無をし先もこれあり縁先

なるちよ年のくれかたに成て住庵
のあるのさくらひとのの色をそ春ちるさを
見ゝを行りるる所度ゝ保川の流るゝ四
季の景色をうつしてこゝろ一ぱい
さくらのあいを保りて伊賀の山中に
分毋のた憤をそゝひし俗の嗜好に
接絡して賀茂神園の涼くみもさよ
頃かゝてやはらよ秋を中ゝれ時と

星ふるさとすか湖水の納涼もこゝろゝ
そてさと三四星の星を壊て家よ宮鞋の
駕をやゝ分ゝ宵いの蓑虫を吹るし
そして傾あり俗なり俗のて傾よ似ゝる
ゝのなるとの交のなるれゝの老砂川の
岸よ中程を記とゝろゝ保ゝ
すとゝ頃所味なゝして人のあゝく
ちゝ半ゝなゝゝかりくしのさし
ちきてゝるゝにゝれやおのゝよ

ろうろう老人の弱よろひておちへ浪弱
峰て月もかくのおもかやすして憂苦
此世の度も たとへくの方こと心さしゆ
きれしを支考の詩の方より作とろ
ぶて財布の此をおうへ世なもおのあなり
きゝを湖のあるのやうてきゝしみ立
わうれて川ゝはなるひおちしうを毋を
のとこ青を春のこくく時をいいかこさと
ら原今秀の真い宴何をなうゝさ鶴ちん

ろうろう醉て行ものあゝを罰盃の彩
おのをのをきんとたゝあれあひぬ

芭蕉

三の月や嵐て時雨ゝ初
寒をゝゝゝゝゝ蓮の根先 世話
雪いゝゝの行ゝ入て 仲高
たゝ軍義よ五枚おゝ也 惟然
月夜の雪もちよろ雪の色 支考
きゝあて待きゝ駕かよ 芭蕉

猪を移場の和へ追込みかゝ　翠
山〻〻ふれ名をきりてちり　言
鼠柱ちる西楠ふきもむ雪鎌　然
寄て立夏をきゝろ照像　考
おれう度寿ゐ猪ゐく猪の書　蕉
持仰のゐゐよ夕日さゝ也　翠
平畦ゐ葉を府ゑ一たゝこ疎　考
新風ゐゐる門の左風呂　然

馬引て旅ひ知ゐ月の新　言
尾弛てつきしものゐよかゐ　蕉
蹄好のゐ一孔孔ゐ祭れて　翠
四月ゐのく襟もよゐゐ衣　言
素風ゐ善猪のたもアいゐ房　然
家〻〻村へ祢ケゐ〻〻ゐ　考
喰ゐ多ね寿も雪もいて　蕉
何その四ゐ山伏よかゐ　翠

笠ほとを接の付とるとゝ岩　る
巖こいとゝろ仲月明〳〵　来　蕉
おもかゝ陰先ゝ川夫木の所　考
陰の日和よ雪乃氣色　然
雪〳〵ゝろ手紙をね頃のうはな　翠
ゝゝかんの手をこゑ〳〵あゝゝゝ　る
封付〳〵文笑まゝゝ月の雪　蕉
ゝゝゝしあゝ〳〵盃の上鶴元　考

ムシロ
雪籠つゝ四帝の角の河原所　然
ゝゝ陰をあゝゝ表　一固　翠
々のゝゝ徒を見ゝ居格の上　る
ちゝな待のぶんゝ少中る　然
盡ちる花のゝ龍却よをて　考
勝ゝけつゝしゝ桜の下　高

續猿蓑集巻之下

春之部　之花櫻

温石のあらくあつさや櫻　嵐治

寢付かに入る月の朧かな　其角

朝よりはぬれ川白し櫻　芭蕉

ちらつ迄やあの般若の面　洞木

角ぶれ人まかしやなの花　太祇

花ゝ咲て行ゝ軒のやすらひ　酒堂
冬貴なる酒石よりあらひて又君
うれしき七辨のまゝにれよ思ひ
いとゝ淋しに
酒新石よ奥の雪きゝ富の花　惟然
賜ふて僅ちとれはりちゝ物　支考
人の幸も多く霜ふり桜　治德
ゝゝる身や哀の小屋　猿雖
七川より花ゝんの中か　陽和

乙州
咲花をもつて老木か　木芝
冬座や赤ゝとゝ雪ふり桜　作荷
二の服やさゝ陽の朝の霜　子珊
簑虫のもゝ方ゝ揺ふ船　卓袋

田家

碧蒻の名和やゝん富桜　李里
咲かゝる花や飯米又十石　桃首

山門の花ものしし木の梢より　一桐

なつかれぬ春の根やあらぬ花の影　如雪

花さきさきて仮合ふ人も淋　其角

ちれやちれ雲床あるべき花の雲　少年　一流

ぬり雪駄の赤ちらめく軒の花　卓袋

一日も花のあてやう馬船寺　泊園

八重桜京めぐり鞠ちらちらと雪小　仝

若葉

濡縁や苔ちらちらと土かたのぐ　乱雪

ちりの跡やゐ沼の若葉ら船　田翠

夕波の船よそそぐ風ちなつ　孤屋

一切の杜冊を雪ぐ若葉うる　尾頭

柳　附柳

喜もやくるまをとゝの月と物　芭蕉

柴さゝれやちるゝ棚もやちるの花　野水

守梅の夏ひ紫かり野老賣　其角
星坊ゑ雉ゝゝや　かゝゑの花　昌房
投入や梅のわゝもゝ苔のかゝ　良品
雨傾の夜ゝれ梅のゝゝ　曽良
あゝゝ紀羽家簾ゝゝし梅花　万乎
為宮や梅の除ゝて下駄の跡　魚日
ゝゝ梅や岩ゝゝゝ　千川
震所や梅のゝ方ひきゝゝて簾ん　大冊

天神のやゝ海ゝ沿て

多ゝ宮ゝゝと行ゝや梅の薙ゝん　遊糸
ゝれゝ北野のなりや苔ゝ御　千枝
対ゝゝゝゝゝゝ川やな美　意え
ちゝ道を巻ゝちゝゝや古柳　に東 李由
青梅のゝゝれゝゝゝや馬の曲　九ゝゝ
痛をゝけてゝゝ毎ふ通ゝ梅ゝ枝　巴丈

鳥　附魚

雲よ　もろかづら　成　氣（ナケシ）　塵ゝ　千車　其角
うゝひとや　野を　嬢　越の　風　吾　あり　史邦
雲に　多　多と　体　ちゝ　ゝ　智月
雲や　松の　ゝ　ゝ　ゝ　蕉　芭蕉
陰　蓬　ゝ　け　ゝ　雑の　ゝ　ゝ　玄来
蓬　面や　簑　ゝ　ゝ　ん　雑　の　西堂
駒　ゝ　の　月　の　ゝ　や　ゝ　ゝ　ゝ　傘下
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　長紅

燕や　四　ゝ　松り　ゝ　ゝ　ゝ　鳥の　野童
巣の　中や　多を　神　て　ゝ　燕　少年　峯風
雀子や　姉　ゝ　ゝ　ゝ　雑の　梶　槐市
縄　ゝ　に　ゝ　雀　乃　子　鋼　阿瓢
切　鴨　や　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　て　ゝ　駒篇

廿万　昭　面　河　乃　陰

節の　子　ゝ　ゝ　ゝ　陰の　言　土芳
かけ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　少　鈍　小　圃水

きくらげの一かとまりや沒こめるく　子珊
白魚のきらめくもはたまなへ　山蜂

保川よあらうかて

きくらげを ぬるひ蓑くるやをけ　真角

まちうた

かくりてもかくれ川せばやきの笠　正秀
ぬるるやたかつけくれ 鐵の道　山筋
蓑の形やいろれのるよりあれうん　羽紅

川淀や淀をやきもうあの角　猿雖
雪の面きらやきの筆の先ら　圓指
味ひや梅のうれよりあうきの秀　車来
茨きくく咲深かしのきの思あさく　荒雀
姫ありうろひ蓑れきくくれけ　馬見
疝きくれきの切月や落の塔　拙作
如くくみの月形よ蓑きくれ工夫根　乃龍
昇蕨や笠とり山乃杉くて　正秀
くくく新月のあちひよ肥ろうきふけ　夕可

月の影に猫の抓おし尾櫻居芽け　一桐

蒲公英やそこらに花の咲く花さかり　圃芿

猫恋　附胡蝶

恋猫や有になく声猫の恋　櫻丸

うかれ恋にやせてや猫の盗喰　支考

おもひ寝の月乳屋かけゝる野猫かな　ミノ 巳百

白月志川かや

かゝりても翅を動く胡蝶かな　柳梅

衣更のさかりや白き鶯の羽　惟然

蝶の羽おつる椿にうきなかな　闇指

風吹に羽の乱るゝ小蝶かな　志羽 室可

三度寝して花に踊りし胡蝶かな　雪窓

春鹿

振おとしけりや鹿の角　沢雉

春耕

畑鋤のたまたまおぼえて麻　木吾

笛れや竺籠とゝ孔雀月和　山篇
千州乃田をかゝ[illegible]人　一涯

桃　附椿

白桃や[illegible]も[illegible]の色　桃隣
金柄をすゝ盃なり桃の花　介我
伏[illegible]ゆく葉陰の上の蕊のむ　雪芝
梅はゝ[illegible]をゝ[illegible]の花　水鶏
[illegible]さゝゝ桃や寄[illegible]の脚躍　其角

江東の李白ゝ祖父の懐旧の詩[illegible]
花のし経文[illegible]
[illegible]を

小服綿よ光をやとゝ[illegible]　角上
[illegible]を枯て[illegible]花咲樓[illegible]　珍香
取あけて[illegible]や樓のあるの[illegible]　洞木
ちゝ樓のまりゝ[illegible]孫て[illegible]　野坡

歎々　附蹴躍　藤

山吹や垣よ[illegible]　一童　閑坊

鶯

四家乃人より對て

山吹も咲ちらす桜孔鶯なきそ　西堂

塀おそ孔はくし孔株や鍬のあと　雪堂

霞晴や稚蓼よりそ孔蓼の花　前口

春月

山の端をちらし兵なり春孔月　北清　魯町

春夏附　春雲　鮭

蛙

拍子つきし草の社うや春の雨　前口

咽さへ調子合ひて春のはつめ　乃龍

春雨や蛙丸あるうき家やうら　游刀

ちらふかしらら馬の武江の
猿店まきらるる時

春雨や枕ひ川るくくひび　支考

ちるるやうの蛙ひ川るくくひび　桃首

清雨や面の波ひ川る蛙笠　風麦

ひけくくの蛙の居る石乃直（コリ）　風瞞

汲手

乃ちり忙の浦波うちよるれぬ汲手小　去来

不川よ富士の影ちよるおひ小　園指

雜春

霞かりも春あらしに靡る芦加帳　許六

霞ちるや春こさ神うち桐乃蔭　風瞳

思ひこの松のうちらやわら緑　北方

うけうふや巖よ勝の掛ちかう　配力

小来花ちるのちうれや瀧治家　万乎

あり毎に行治も明まも市北中　玄蘇

末の芽うれ雀かうれ秋ぬけ系　均水

まちの日や茶の末の中北中宮ひ　正秀

三月の雅うちぬるうれ伊基の他　仙化

引うる北中の立ちうも四課とり　支流

三月雪

勝ちおを白屑賣北名殺うる　支考

歌題

[illegible]　　叮年　武仙

[illegible]　　百歳

[illegible]　　尚白

[illegible]　　螺の貝　　圃菊

[illegible]　　山鋒

[illegible]

[illegible]　　千川

人もこぬ[illegible]の[illegible]　　芭蕉

[illegible]　　其角

[illegible]　　嵐雪

[illegible]　　去来

[illegible]　　士芳

[illegible]　　風臘

[illegible]　　猿雖

鶯宿
卿雪
耕雪
左板
前川
斜嶺
山路
任行

竹戸
昱乎
沾圃
圃角

ゑゑ部

郭公

其角

曉の雪をはらはらとこぼしけり　湖水のさゝ濁　丈子

きゝすがら何をあはれとおもふ　胃元

蜀魂峰ぬけ来る　支考

峰ぬけの名をもとゝぎすとなん　如雪

燕の左右むらゝ雫　芦丈

淀よりも勢田はなつかし子規

比ゑの山の梺にて
順礼乃吹して通るとや

郭公かさゐの森や中やとり　沾圃

木　附草花

橙や月にふれたる木の立　陶指

里しの姿かはりぬ川むくら　野荻

園中　二句

此中の古木をいはれ柿の花　此筋

手功の其木も柿の花さかり　千川

姫百合や上よりさかる蛛の糸　李龍

題山家の百合

志らやへの手を染る百合の花　支考

山もとのかれて咲やさつき　尾頭

冷汁をさくすましけり杜若　沾圃

手のとゝれ條ふとれし杜若　イカ宇多都

ゑのこ草や茅子の花を先さく　拙像

ささげ花の元奥

昼ゝやゆるされぬ花蓋　沾圃

夕ゝや酔てゝわれた窓の元　芭蕉

夕かれや禄ておきてあまる　嵐蘭

藻の花をちゝゝ蓑ゝる入江汁　孫香

藺の花に敷さしれの濁り汁　しゝ筋

蓮のゝゝゝゝゝゝゝゝかゝれ離れ　白雪

客あるゝ〜ゝ蓮の蠟おくん　良品

凡

朝露のゝゝゝて涼〜凡の土　蕉

姫蛍ゝゝ神ゝ入ても寝ゝゝた　至曉

ゝゝん

蕭れなる膳ゝゝゝれぬ杜冊汁　風流

子笛

京入やうの羽の四枝の袖中　知七
早乙女は猶てやうん芋の葉　閑指
姫とろ男の枝おくれうの蔵小　亀月
四枝音まてやう部の風ひも　童竹
一四作くりめうりてやの方　少枝
星のよう燕振ろ子蔵の船　支考
蛍
敬老次の烟てうくちうる　許六

三月に芋の蛍を吸ふ　黙莢

納涼

涼しさや竹振りの蔵作くひ　半残
竹葉記や廣葉に吹ふ夕涼　惟然

涼みの為よ昂て

ちちん蔵や風やふらん死涼　史邦
涼しさや蜑を蔵その強をうら　重翠
石ぬぐ〜や裏門出て夕涼き　牡年

涼しさや牛孔尾振て川の中　万平

漫興三句

腰かけて中に涼しき階子哉　洒堂

涼しさや樣より足をぬぎ捨て　支考

世辭を知らぬ人ぞ涼しき　雪芝

茅屋にまきて

涼風もわすれと殘るこゝろ哉　游刀

いとか畳中をぬけて涼し船　仝

立ゐりく人のまぎれてすゞしき事　去来

黙然よこまろ涼しさや石の上　正秀

殘人の惟子こゝろ床夕ぐれ　土芳

涼しさや一定羽殘の風あるべき　我眉

夏涼やちひのこゝろ世を月ざす　里圃

盡句

かゝとまるや照りかゝとまる座の隅　野萩

李盛りこゝろ世のちゝの暑哉　万平

寒鬢者のいまさらに先やさきだ一
ゆ　ふるつ伝ふる
ゆきもやゆきもなほ清けて麻冷の墨ふる　正秀

取菁の門のあつさや梅ばちひ　乙州

蝶さらら日盛りのつ一　毒新　怒風

茨ゆふ垣も赤まるゆ暑う船　尾張　素堂

茅のくさや暑き月に乱あつ尾　我峯

あつよりや雨をうさ乱れて　京　京

積あげて暑さいやあ乱ゆ面　卓袋

粒よりなる絶もあのつさう船　里東

立ゆ乱れさせいとうやの暑ふる　洛園

赤のくよ

首に巻くくくく岸の岩ふよ　可誠

乱作や烟のいいろ庫裏の窓　曲翠

五月雨附夕立

きくくゆうやまくくた徽の中　不玉（右羽）

さくくれや蜑が家乃烟　芭蕉

蹠

五月雨や蹠ふまれぬ蟻ぞなき　治國

夕立ふるさと人家まばら白傘　拙假

白雨や蓮の葉ふくぬくぬくと池の苔　苔蘇

夕ぐらやちらちらけぶる行の波　曉烏

伸ぶ高く傘ひろる宿やまゝ所　圃水

蟬

白雨や中高りして緑のあゝ　正秀

ちりとまて蟬て蟬の去りし蟬の高　胡故

森の蟬深くおちつきあり　乙州

蟬啼やぬの獵る宮のまつ間ふる　曉烏

うの川を

池の月や潮ふくまて体観　葉拾

雜之

不合点にて手の動やせ團ゝな　枚風

金の嘶ふ・ゑみ葉や寺孔畑　荆口

夏痩も孫ひの中の去とゝなり　如真

鵜

川柳よりて、

きり焼や麦かゝく魚て柳鵜　文鳥

異の草に氣うちもや園の茶蘇　寫雪

夕園さちうもきうや酒ちも　水鶏

おうこさとうみき世を
やしなひて

魚ひろる幸もひろれ浪うちハ　馬見

柳かゝやかゝ筑かゝ日の面　[illegible]

澤何や遠行ゆる面のあと　野童

編半ちのり茶のうてあきうも　水鶏

雨の閑吟を
ゝゝや

うゝ形ゝ天うゝ森のちや　芭蕉

粘うちな惟子かうる中　惟然

貪俗のうゝゝゝ
姉きゝよすうなゝ
弼亭を扇一ちす

みゝの
ふうこ
日の
世ふる

惟子乃ふうひをやす　淺五百　支考

穂々部

名月

名月に禁の雲や四のうまもと

名月の花ふるとうたて 棉屋

くもり光 伊賀の山中にして名月の

あとの二句をなしていつれも是

いつれも非ちうんと付しにけりわ

つへうに月をさ川うの狼の雲を

それあらさちうつよ あ月の

[illegible]園と園位[illegible]一のあとりやさ[illegible]
[illegible]を雪[illegible]樣[illegible]とあり[illegible]て平田
[illegible]しと[illegible]を老杜の唯[illegible]
[illegible]いろ[illegible]もの[illegible]
[illegible]の棉[illegible]を[illegible]
[illegible]て[illegible]やり[illegible]て今の
[illegible]所の一筋[illegible]侍あらん有乃
[illegible]を[illegible]
[illegible]おもひやら[illegible]
[illegible]侍[illegible]有に侍ありて
[illegible]の[illegible]

老前ハ寂寞をも[illegible]侍を[illegible]
[illegible]五[illegible]何[illegible]
[illegible]をやさ[illegible]侍のん
[illegible]

支考評

名月の海より冷る田蓑[illegible]　洒堂
[illegible]月やあるよりかゝれを[illegible]　如行
[illegible]ん月[illegible]び　[illegible]

姉川あるいまあひやまいるあの月　智月
名月や雲の陰を人のゆく　園指
明月や文殿よりゆかやまと客　冨素
明るゝや西の空ゆく陰もなし　石玉
中切の梨子の実のたく月くゝり　配力
名月やうのゝゝゝゝゝゝゝゝ　左柏
明月やたゝんのゆくる人もなし　圓水
松ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　山峰

明月や雲ぬ雲ぬよりの雲の内　風国
名月や四人人帝一艘　需笑
老の身をとゝ月の月も内てゝ　重女
明月にかゝる星死哀なり　泥芹
笠のゝ国ゝ安ありてかゝるの
雲をおゝひゝたりゝ
二人まて雲化ゝゝゝゝゝゝゝ月ゝゝ　支考
芥子府と烟まて月ゝゝ　空牙
柿の名化又明ゝゝゝゝゝ月ゝゝ　知真

山ちかき千川にも霧の月　宮比
名月や里のあちこちの遠寺　木枝
場に居て月見ぬかたや遠機　利合
明月やあかしより北井方　冊楓
明るとも何もちらぬ花の道　野萩
船入乃客よ千川月見ぬ　正秀
信川のちりとりの
月をうつして
舟引のうかれてうけて月見ぬ　文子

待宵の月に雲一ツ宮殿御　景桃
家の三老女とふ人あり三文
お盗り秘
おわらひもて
姨捨を　南の
霧おきて月入あかつや嫌の月　浜圃
雲ちらで月まつ人の梢ゆ　馬芝
月影や海のちかく毛扉下　里東
　牧童

保川の宗匠なる桂を訪ひて
紅をさして

川ぶねこの川ぶねや月のなか　芭蕉
十六夜をわが川ぶねの窓のもと　仝
いざよひい窓の月もやがてこの　猿雖

七夕

こよひ月の月のあるのあるの河　惟然
星合をこそ待て朝ぶね　常矩
船船のこぎ出でぬ月の船　東潮

あなたこなたをいそぐ船よ　作園
船風や薫姫の園もら　乙州

立秋

栗ぬすむ庵よりほとゝぎす　露川
秋の川や中より吹るる蓮　左次

蟬なき

船霧の花遠ぶる桔梗かな　梅翁
細工にもなるぬ桔梗のつぼみ　任支

女郎花わけぬる馬骨の姿かな　渭子
きさらぎ　彩波の枝のくれ船　馬莧
一筋も乱れぬ柳　烟るこそ　烏栗
弓固さる比なれや蕨もえ　支浪

贈芭蕉翁

百合さる芙蓉を踏る余る　風麦
ちよ姫のなまめき詩　支邦
枯のちる音を拍子や鶏頭花　万平

鶏頭や庵の寒さ時雨あり　芭蕉
鶏頭の寒さ高さ日和かな　至曉
折しや雨に花の
芋花さぶや動く秋の風　雪之
山人の屋敷時雨れ鶯　荷兮
風毒よ長く尾ひく雁の声　杉下

[illegible]

新蕎麦人[illegible]月夜　田上尼

あさうの這ふてきて庭に松ある　園抜
ふるもきなのさうたいやきもて湯の舟　風麦
朝京に志ちれしーしやや紙帽子　其角

蛍附烏

さらさらと傍に経る舟うる　可南
電馬や新ふ蛍つく柳うろ　小枝
火の消て胴ふ十ふ火のちた　正秀
秋のあはや麦と鶏とちちし　水鶏
ふの蛍や形ふ沈今し月の影　杜若

碪砧や何の味ある竿の先　探れ
鶏鳴や鶏の腹まで明るのと　葛京
蓮の葉に新さうん鶏の声　示峯
ぬけかふよりひて死る秋の蝶　文孝
屋ふまに中ふく浦の苫屋　馬莫
鶏鶏や乞り来ふ戸川京　氷固
蓼の穂まで見ふ風吹や峰鶏　支考
老の名残ふ蝶ふて四十雀　芭蕉

稲風

秋の野や二番刈たる稲の時　游刀
雀子乃鳴もうるさや秋の風　式之
何やらもかしましき秋の風　支考
柳のまゆや初さむき秋の風　風国
をのつから草の実を吹かみ　圃燕
ぬんちるや吹ちらしたる蓑　れろ
あれしてまた海の吹分る船　猿雖

稲妻

猶ひて苫屋しらるる稲の蔭　一東
稲妻や西ゝ海の色ゝ海の上　宗比
吹ちるや稲つま戸ゝの端　士方
いなびかるや家の方ゝ人位の　芭蕉

木實　附菌

栗の実の落て鳴るかけ　為有
炭焼に供柿たのむ伏ゝ　玄虎

秋の月和らぐ尾花柿のいろ　酒堂

ほのぼのと霧をもるく梅くゝ　[illegible]

きゝ草や姥ゆも清尾一盃　作圃

伊勢の山中より西国の家居を待ひて

松茸や姥ゆらのさゝ山の形　惟然

[illegible]

きゝ草や[illegible]木の葉のこぼるゝ　芭蕉

楓

後尾の塚よりそれゝり村ゝ　小鯉

庵

庵すれに[illegible]の[illegible]の[illegible]　風瞳

[illegible]　一敵

農業

起しは人を迎ひり[illegible]の[illegible]　車扁

木の下に種[illegible]　買山

[illegible]の[illegible]の稲　如雪

[illegible]の中徒よ
[illegible]おとりれて

蕎麥を十三石程てかたに落る　芭蕉
早稲刈て落つゝ百姓　乃龍
山雀のゆくへも稲の穂　斗從
落りゝたる河ゝ鵜（ヒハ）の毛の畠　支考
一雨の寒や半乃ゝとゝ刈　全
舟ゝ出始よあらし蕎麥の　惟然
百姓なりてゆくゝ初を居かゝ　本元
大海の水の面ひて移次と
ゆくゝ秋ゝ　
ゝの落ゝ舟上ゝ北ゝの種　伯圓

菊

毎年二百十日も忘ゝ　葛章
ゝ初ゝ白ゝ黍の玉牡丹　渭子
煮木綿の下に黍ゝ黍の花　支考

題益屏

ゝゝゝゝ山路の黍の穂　兀峯
借りゝ　蕎の鳴ゝの黍　丈芝

暮秋

[illegible]や背負ふて行る秋の雲　野水
[illegible]秋を鼓ちの糸の恨う船　乙州
[illegible]あきやまを[illegible]ろけうの葉のいろ　芭蕉

雜稿

又六十海[illegible]ての[illegible]て般一ウ　之道
[illegible]葉[illegible]死や[illegible]修[illegible]舟を松の事　團友
あ[illegible]舞の[illegible]ちうのお[illegible]　畦止
[illegible]る般や[illegible]れ[illegible]秋の雨　[illegible]

[illegible]ひに[illegible]の[illegible]勸ル　荻子
[illegible]や稲[illegible]の英[illegible]　万平
柿の[illegible]に燒[illegible]墨[illegible]筆有　素門
[illegible]に[illegible]骨少[illegible]も　宗波
の笛鼓[illegible]て[illegible]
[illegible]畫て鐘[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]て[illegible]

[illegible]

稲つ屋の猫

[illegible]

みそこ部

時雨 附 霜

[illegible]

野坡

小枝

芭蕉

露沾

馬莫

[illegible]

平押ニ夜々西へまはる時雨かな　野明

栄賣やはしくれの峯遅り　南指

椀賣も出よ芳野の初時雨　空牙

兄鮒のもてあつかひ時雨かな　為有

宮守や猪にうつる一しくれ　鶏口

為ニ盃て唐蜂もぬる時雨かな　野荻

柿色も日和もなしやむら時雨　露川

宮ミこもり志くれて星も雲隠時雨　里圃

ほやきさしくのくゆのまきみの
目ゐるくもそめあはうりかれ

沖西の船目くりかえ時雨る船　洒圃

玄川ゑねや本の土かくれの縁　小鯤

冠とつゞや一はぶし秋の霞　支考

元禄辛酉之秋
九月恭ニ堂ニ菊園ニ遊

宇治の宴を初めて月のにかゝれ
まつりけるちえのきこうれ
以下はしめくゝもかく欠ニ事も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菓の香や夜の明くるも桜の花　芭蕉

柚の色や起あがりそめて菓の雲　其角

菓の気味ゆゑよ墨の匂ひ　桃隣

八専の雨やあつまる菓の蔵　沾圃

何魚のかさしに赤ん菓の枝　[illegible]

菓屋寄合図を引きけり　馬莧

紫菜の隠士可[illegible]の翠を敬し

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うゑ[illegible]ぬ琴や作り[illegible]の秋　車庸

草

[illegible]や[illegible]月の遠方　曲翠

[illegible]咲や[illegible]からの水仕花　氷固

[illegible]の[illegible]や[illegible]　惟然

花暴蝋り趙南の[illegible]
山家住ふの影よりすゑ

一雨もこちらぬ事の氷り南　芭蕉

山茶花きえ[illegible]り閑く咲り花　車庸

[illegible]の[illegible]川や寫の[illegible]　土芳

[illegible]も[illegible]や[illegible]花　露笠

木茶ふ　附冬枯

[illegible]ひな[illegible]木の[illegible]ふ[illegible]の[illegible]　浪徳

日生さ[illegible]て江の[illegible]　露沾

[illegible]川や木の[illegible]の月　惟然

[illegible]より足さきうりよりさ　あの葉ゆ　枳風

[illegible]の
[illegible]をうめ[illegible]て

[illegible]より先　[illegible]　一道

枯[illegible]　杉風

牛の[illegible]　[illegible]　桃酔

[illegible]　乃龍

[illegible]　利牛

[illegible]の首　支考

発句

木[illegible]や[illegible]　智月

風や背中[illegible]　風竹

木枯や　刈田の[illegible]　惟然

[illegible]や[illegible]牛[illegible]角　塵生

夷講

[illegible]ひす海　酢賣[illegible]　芭蕉

[illegible]　[illegible]　利合

鳥 附いを

乃やの海をさして

塵陰よりめぬ日もなし 庸象 白空

遥かけて壱ようの千るの事 鶴雲

かあちとと戻中やちの死角形 おを

入海や冠の笠に峰千る 園拓

鼯(ケユロモ)に鴨てぬ鴨乃笠 芭蕉

ゑ鴨を犬追うるけゝる水 乍木

枚ほうろひのつよ生蔵嵐ゝる 利雪

うゝゝやゝ海月よ立るかまゝか 車庸

尺ゝ遠や子持ひゝあのうゝ氷 代水

一塩よきゑ白魚や雪の前 杉風

かゝゝ姫ゑ川や脇をかゝて降霧 拙假

杜夫魚を河豚の大さゝて水上よ海ふ

郡の川よのゝあるうをかり

冬月 附食

嗇さのやの門賣ありくみの月　里圃

あゝ猫のかけたる軒やみの月　夫子

何度より霜入るまてなり猫ぬすま　力春

ふる仏やの門をたれをこの月夜　支考

埋火

埋火や骨ほそき客の気ちゝ　芭蕉

仏一さゝあるゝを鉢たゝる安雄　少年桃先

自雷や月を返りの壺雄　同木

雪

如雪や門に檜あり夕月さす　其角

ゝゝゝゝ月雪すゝ酒の味　仝

雪あゝれ心のゝゝるゝ　夕栗

鶏鶏ゝめてゝゝゝゝれ雪　祐甫

雪垣やきゝぬ人のあてゝ　蔦雪

ゝつゝゝゝ雑を出やりの雪　支考

行雪や雪傳かゝるすゝ　懐　圃吟

里人の手ふれぬ月枝のおれ　文孝
繁利を降す雪ふるこゑの　陽和
伊勢大和ふる山雪のた　配力

神樂

おもかるに歯も吟ぬ冬ごれ　史邦

行ぶくよ

食附やうなる人の沖和　路孝
行ぶくに十駄賣をすあり　馬覓
娵入の門もとろと行ぶくよ　許六
振を送りうる鮮ぶくよ　伝圃

煤掃 附 鮮つよ

煤ふるや嵐迫ぬ楊の中　孫香
煤掃やおもかるこゑの孤　黄逸
ものたる儀のかゝや蝶ふ年　馬覓

嫁ぬすみ　ゆかすれてゐる浴衣
煤掃や　折ゆ一枚　流れ
餅つくや　火をかこんでゐる男達
餅はくや　あくるの　ゆふ鶏の
もち搗の　手伝ひ　ゆふ　山伏

歳暮　附　歳末　衣配

ゆく年　ゆく年　迎も　ゆかた
門松や　ゆきて　ゆきの　洗ひ髪

尚如
惟然
岱水
荒葉
馬佛
角上
里東

賣ゆかとゆくても　ゆく年の　ゆく
猿もゆくのちり　ゆかとの　ゆく
大ゆや　新ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
袴ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
年の市　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
ゆくゆく　小豆も　市の　ゆく
引ゆく　一ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
桶の　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

草士
車美
万年
李由
其角
正秀
荻子
猿雖

天鵝毛のさゝ[illegible]かゝ[illegible]て[illegible]の雪　惟然

陰荻よ筆を結[illegible]て[illegible]の雪

はるを圖司呂ゝ[illegible]羽[illegible]あり京に

のちゝとて伊勢すもゝあ[illegible]て作りかれ

いらのゆゝしの[illegible]かゝ[illegible]ひ

ゆゝして今さたよ

人とそたり

盗人よあるとおもあり[illegible]の雪　芭蕉

余所よ[illegible]てさんすの[illegible]の　支考

衛に[illegible]所も見ぬ[illegible]の中　土芳

[illegible]の[illegible]弱りて[illegible]の中　高口

[illegible]の[illegible]の[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]　少年　桃後

[illegible]肩を束の子[illegible]きあ[illegible]　山峰

一志[illegible]峰て靜[illegible]陰[illegible]の鶏　利合

雜々

小原風に笠を挽[illegible]　舜嶺

挽行よ[illegible]風[illegible]し[illegible]の端　土芳

井の[illegible]の[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]　李下

[illegible]や山伏村の長閑さ　仙枝

[illegible]らをのら開けや　土龍

火燵より寝ゐ[illegible]時を[illegible]か　圃仙

山僧や猿ら庭掃くみな向　雪芝

廻枝ゐ人参の根の[illegible]か　コ谷

[illegible]や[illegible]く影の[illegible]所　作圃

杉風

釈教之部　附追善　哀傷

涅槃

涅槃像あうよ寸長[illegible]　作圃

弥[illegible]ん今や般[illegible]今の弟子の　芭蕉

山寺や猫寝ろと[illegible]ねる[illegible]像　不撤

貪福のまと[illegible]涅槃像　山鋒

雀仏

隆仏やたゝ〳〵ちる井戸のやま　曲翠

蓮花や御ゝまれて二ゝ月　不玉

隆仏や釈迦と提婆を従弟と　之道

盧舎

冷泉もゝなれたる水　嵐雪

霜をたゝのかさしやうき課あふ　玄末

陽炎や坊ゝたゝあふ色あふ　作圃

甲戌のゑ大津の侍をこの

かゝのゝとより消息をゝれりれ

き四里よりてもて盃會をいとちかくとて

家をゝなる林をきゝ蝶の墓ゝ系　芭蕉

惟中年　二句

うかゝゝゝ和尚庫本の著もおもゝ　惟然

その新をきりぬゝその子を秋の風　支考

ゝゝゝゝ

誹諧

青の空也稲妻あのもゝろゝのはゝ　木芝

さらるゝ稲妻やとぼそ桶の水　支考

柚も柿もおちつくれあるり法師海　沾圓

朧八

朧よりさらりてくれる納豆汁　許六

何のあれかのあるとくるまを大呼海　如行

雑長

陰氏の真如堂にて

善光寺如来開帳の時

涼しさも腰ふみたる仏　去来

みちとせ経てさすがに二なきけりの名　智月

けしの蜘蛛家をもりて仏在世　乙州

ものふに川越向ふや富士まで　李嶋

手まさしに朝の月涼しるる仏　野坡

食堂に雀鳴なり夕時雨　支考

旅々部

送別

元禄七年の夏芭蕉翁の
ものをくるるりて

妻ぬるる袖の涙の乾ぬ間に　荷兮

ひのくれや柿喰ひなるゝ鐘の音　惟然

許六ら
本寿坊におもむくに付

旅人のたちよるも似よ椎の花　芭蕉

留別

倍の惟然ら宅より
古郷の伊賀に帰

嵐やも　ちる芝の芽ひゝかり　丈艾

鮎の子　死ぬ〳〵迄　送るこのかな　芭蕉

甲斐の〳〵の湯に訪ふて
ら〳〵死のらせにかゝるとて

手ありて牛に乗りけるも　苔もなし　木芍

鞭つ馬や　信濃を出る　秋の暮　却人

あへもなく　つゐる川幅や　旅の君　野往

市の門の初もらひ
〳〵のさひをとて

ろ死〳〵を　谷地かりけり　市右衛　ろ羽

十間ゝ　小清水のちり　秋の風　許六

大名の　乗物ゆるす　初雪　仝

〳〵屋敷にて

〳〵ちり　茶の花そゝ　川越盃の　猿　角〳〵

〳〵〳〵　土手の　市蔵　猿雖

姿なの　〳〵〳〵　旅姿　我峯

おもひたちて旅に出る馬　支邦

田園の心さしもいかに侍りしの
ちのくにくだりて

文象の扇かきつけ侍る秋涼　亡人　呂丸

我庵園にて旅の宿りを紀　作園

常陸の国にあるひとりふる所を
かりそめにてやとりぬんとすに
その初めさ侍るあるとして
ちかくとくれをまつ一夜別時の新の
下にかりあり　毎月

椋の葉ちる時や椋に出る粥　支考

きりぬかぬ道なるとふ杖もと　仝

元禄元年の秋　桑波の第五
より武江をおもひくとて路用
の驛場年ふるにいたりて

宵かりて名をやのこるこの秋　[illegible]

續猿蓑を芭蕉翁乃一流乃事と
沓の人の模倣いふるを志ら近代の
俳伊賀と称乃見れば松尾ふり
此事なり其二巻ともを編て
俳諧の家の本の事をあらん
世ふ廣むるをゆる拙ふり書中
或い是ちけしあるい其入ふれなる
くちはいる事稽の事なしふり

一字ゆえに一切をあらはせり
乃書こゝに孫を〳〵迄の教
とゝ迄也

元孫十一寅
五月吉日